

平安中期の歌人と薫物

—源公忠、藤原公任を中心に—

田 中 圭 子

序

薫物（たきもの）とは、奈良時代以前に東アジア海域内での交易、交流を通じて渡来したと伝わる古代の芳香剤の一種である。材料には沈香をはじめとする複数の香薬が用いられ、その調合は、それぞれの材料の分量を記した処方に添って行われた。正倉院文書の買物注文記録には薫物の銘と同じ香関係の品々が含まれており、奈良時代以前には完成品を輸入して用いたと見られるが、薫物について記した古典籍の記述によると、嵯峨朝以降の時代には、和人独自の処方と調合法に基づく合香が行われていたとされる。

薫物は、宮廷社会の様々な行事の場から日常生活の場に至る迄、高価で優美な贈答品として、身だしなみの道具として、その他様々な用途に用いられていた。薫物の説やその享受のあり方が官撰国史に具体的に記録された例は知れないが、当時の文学作品、例えば物語には、理想的な世界を形成する為の美的要素の一部として描かれていた。『源氏物語』梅枝巻では、物語の人物が調合する薫物と、実在した名家の薫物秘説とが関係付けて物語られ、それらの薫物が物語世界に及ぼす美的効果や社会的影響力、或いは作者の意図について、古注釈書以来、様々な視点から論じられて来た。^{注1}

一方で、平安時代の薫物が、当時の文学作品の内容だけでなく、文学活動そのものと関わることにについての指摘も為されてきた。『平安時代歌合大成』では、行事の中で薫物が用いられたと伝わる亭子院前裁合と天徳四年三月卅日内裏歌合（以下「天徳四年内裏歌合」と略す）の記述を検討し、当時の歌合に於いて、薫物が単なる消耗品や美的要素でなく、「興趣を盛り上げる効果の一つ」であつた可能性が指摘された。^(注2) 平安末期に藤原範兼が勅により抄集したとされる薫物指南書『薫集類抄』に薫物の説を載録され、或いは『源氏物語』古注釈書の『原中最秘抄』が薫物名家と伝える人物のうち、勅撰歌人は二十四名にのぼる。^(注3) 和歌だけでなく、薫物にも長じていれば、薫物を交えた歌合のような催しに際し、主催者側の求めに応じて歌と薫物の両面に参画する事も可能であつただろう。

本稿では、亭子院前裁合と天徳四年内裏歌合に於ける薫物使用の意義を再考するとともに、薫物名家としても知られた平安中期の歌人が所持した薫物の由緒と彼らの合香活動の実態について、家集の和歌や新出、既出の薫物資料の内容を参考に検討しながら、薫物との関わりが歌人の動静や創作にどのような影響をもたらしているのかを考えることにより、平安中期の歌壇史から見た薫物の特徴について明らかにしたい。

一 歌合、贈答歌と薫物

一① 亭子院前裁合

『薫集類抄』によれば、亭子院前裁合に於いて、左方は菊花という薫物を、右方は落葉という薫物を、それぞれ用いたと云う。

清楨公云菊花方者長生久視之香也聞之薫之者却老增壽杞左大臣習伝之亭子院前栽合左方用菊花方右方用落葉方云々我好此方常用之但麝香一分可令加進之菊花盛開其香芬馥時析花置傍和合之或人云舊干菊花一両許加之云々水辺菊下埋之經二七日許堅封口蓋取出又經二七日許用之若有急用者不用此說而已 『薫集類抄』上 不知誰人「菊花」

萩谷朴氏は、この亭子院前栽合を、延喜樂「胡蝶」作舞の契機とされる延喜六年亭子院童相撲、ならびに延喜元年前栽合と同一物と見て、延喜元年八月廿五日或所前栽合との名目を与えている。（注4）また、同年八月十五夜歌合との連動性についても言及している。以上の催しが同時ないし連続的に開催されたとすれば、八月十五夜に殿上の侍臣もしくは藏人所の衆が集つて催した、月と秋の庭にかけた歌合で、童相撲に新作の舞踊まで披露されるという、かなり大規模な行事であつたと考えられよう。

例えば昌泰元年秋亭子院女郎花合の（注5）ように、花は花、歌は歌で、それぞれに左右勝負の判定が行われたとすれば、薫物についても、純粹な景物として以上の意図をもつて用いられたことが考えられよう。すなわち、左右それぞれの側の美的意匠や和歌の内容を特徴づけ、全体から見た対照性を際立たせる構成要素として用いられた可能性について、薫物の考証ならびに薫物とその他の要素との比較により検証されるべきであらうと考える。

一一② 天徳四年内裏歌合

天徳四年内裏歌合の模様を記した仮名日記（注6）の伝本によれば、歌合当日の御簾の内において、左方では薫物・崑崙方（黒方）が、右方では薫物・侍従が焚かれたという。

(前略) その日になりて、清涼殿の西面の御簾一間上げさせ給ひて、後涼殿の渡殿に、御座を女房方によそはせ給ふ。御座より南には左の人候ふ。北には右の人候ふ。左も右もわづらふ事ありとて上らず。左の方は、典侍赤色に桜襲の唐衣・薄ものの摺裳、命婦・藏人は赤色に桜襲・紫の裾濃の裳みな着たり。薫物は崑崙方を炷く。右は、青色のあをき、裳はおなじ紫の裾濃なり。薫物は侍従を炷く。かくて、日の気色晴れてみゆるほどに、歌ども遅しと召す。左のは遅ければ、まづ右のを奉る。州浜は沈を山に造りて、鏡を水にして、沈の舟浮けたり。銀の河亀二つ、甲の裏に色紙に歌は書きて入れたり。花足には沈を造りて金の筋やれり。浅香の足結の組、裾濃の総したり。あをくらは薄物の覆に、柳鳥の形を繡ひたり。台には柳の枝に作り。浅縹の打敷したり。童女四人、青色に柳襲にて、北の方より昇き立つ。同じ方の殿上人副ひて、出だし立つ。算刺の州浜は北の際に置く。算刺は殿上童。左の歌、黄昏時に奉る。その州浜は、沈の山、鏡を水にして、州にも銀の鶴二つ立てて、金の山吹に銀の葉に歌は鶴に銜はせたり。花足は紫檀を造りて銀の筋やりて、下机は蘇芳にしてかねの筋やれり。足結の組、覆は藤の裾濃、葦手の繡ひものにしたり。覆の台は、銀を竹の形に作りて、打敷には葡萄染の。うなの六人、赤色に桜襲着て、南の方より御前に昇き立つ。算刺の州浜、南の際に置く。

村上天皇の主催によるこの歌合では、それ以前に開催された歌合の場合に同じく、左方・右方の総合的な対照と調和が志向された。^(注7) 調度、服色、前裁は、色彩面では左は赤色と藤色を、右は青色と柳色を基調とし、洲浜の細工は、先行する歌合などの趣向を踏襲しながら、更に技巧を凝らして整えられた。後宴の御遊の音楽にも、当代きつての奏者と知られた公卿と相伝者らが参加し、左右交互に様々な楽曲の演奏唱歌が行われた。

黒方・侍従の二種が撰ばれた理由として、萩谷朴氏は、『薫集類抄』などの薫物指南書に、黒方は冬の寒さに負け

ない香りを放ち、侍従は秋に焚かれて相応しい香りであるとそれぞれ云われたことを引き、「歌合の時期は暮春であるが、深厚に及んで夜気の冷える時に合せて品目を選んだのであろう。」と述べている。確かに、黒方・侍従は平安末期までに秋冬の季節に焚かれて似つかわしい薫物として分類されるようになったが、実際はそうとも限らなかったようである。^(注9) 仁明天皇皇子八条宮本康親王の没後、親王ゆかりの黒方・侍従を典侍滋野直子が延喜六年二月三日に調合、献上した例のほか、黒方・侍従の四季を通じての調合法も残されている。

八条宮（処方二点中略）一説入麝香一説黄鬱金 或加占唐小一分合六種而此本無之和蜜合搗三千許杵此二者不

伝男是承和仰事也延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所献也

〔『薫集類抄』上「侍従」

八条宮（処方一点中略）或云至要方也延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所献也

〔『薫集類抄』上「黒方」

公忠朝臣

黒方侍従春秋五日夏三日冬七日埋之梅樹下

〔『薫集類抄』下「埋日数」^{付埋所}〕

『薫集類抄』には、治暦四年四月六日に二条関白藤原教通ゆかりの黒方、侍従が調合されたとの記事も見える。^(注10) 黒方、侍従の調合や贈答は、しばしば併行して行われたのかもしれない。一方で、黒方、侍従は梅花や荷葉などの他の薫物よりも秀れた種類と考えられていたようである。『薫集類抄』によれば、藤原公任姉で円融院皇太后の四条宮遵子の時代には、この二種類に梅花を併せた三種類が比較的高く評価されていたらしいが、遵子は、中でも特に黒方が優れていると考えていたと云う。^(注11) また、『源氏物語』の梅枝巻では、黒方・侍従については他の種類に先んじて筆が及ぶほか、特に優れた黒方・侍従を調合したのは、登場人物の中でも高い位にあった、朝顔前齋院と光源氏であった。^(注12)

村上朝の催しにおける薫物の種類についても、ことさら季節感に引き付けて特徴付ける必要は無いのであって、むしろ左右それぞれの意匠や和歌、参加した人物との関わりについて検討すべきかと考える。

天徳四年内裏歌合では、薫物もまた、左右それぞれの洲浜や服色、前栽の春めいた興趣に調和し、様々な薫物の中でも格が高く、かつまた対照的な存在として位置づけられる。黒方と侍従とは、同じ空間に焚き匂わせて遜色なく、相性の良い芳香を放つ種類として選ばれ、宮廷行事として催された大がかりな歌合の場に於ける対照と調和の一端を担ったのではないだろうか。

一③ 村上朝の歌人と薫物

村上朝は、薫物の贈答を契機として詠まれた贈答歌の散見しはじめる時代でもある。特に著名なのは、藤原高光が出家して比叡山で如覚と号した頃、知人から薫物を乞われ、手許に残った薫物を梅の花のわずかに散り残る枝を添えて贈った折に詠んだ歌「春すぎて／ちりはてにける／梅のはな／た、かはかりそ／枝にのこれる」や、『栄花物語』に残る、村上天皇から届けられた「あふさかも／はてはゆききの／関もゐず／尋ねてとひこ／来なばかへさじ」の一首に対して広幡御息所が薫物を送り届けたという逸話であろう。^(注13) また、当時の成立と見られる『うつほ物語』にも、薫物の贈答にことよせて詠まれた和歌が複数記されている。

村上朝より前の時代にこうした贈答歌が確認されないからといって、薫物の贈答が和歌の契機とならなかったとは考え難いが、それまでの宮廷社会では、薫物の贈答を契機とした場合、集に採録するほどの秀歌は行われなかったとしたらどうであろう。薫物の伝承によれば、嵯峨朝前後の時代には天皇や親王自ら独自の処方を考案し、御記への載録が為されたほか、てづから調査にも取り組んでいたとされるが、序でも触れた通り、当時の国史に薫物の処方や調

合法、薫物に関わる催し等の記録された例は見当たらない。一方で、醍醐朝に至ると、朝廷が薫物文化の継承と発展に関与するようになったとされ、例えば前掲の滋野直子による本康親王ゆかりの黒方・侍従の調合と献上、または次章で考察する源公忠の「合香之役」拝命といった事例が伝承に現れるようになる。前述の亭子院前裁合も、延喜年間に催された可能性が指摘されていた。薫物の技芸としての地位は、和歌や音楽を超えないまでも、この時期いくらか上昇していたはずである。こうした社会的な位置づけの変化が和歌における薫物の詠まれ方にも影響し、従来よりは重々しく、人の心を打つだけの創意工夫が施されるようになったと考えるのは、飛躍のしすぎというものであろうか。

二 村上朝前後の歌人と薫物

以後の章節では、村上朝を境とする前後の時期に宮廷社会で活躍した歌人のうち、薫物にも長じたとされる貴族の代表的な人物として、源公忠と藤原公任の二人に着目して考察する。彼らの家系や彼ら自身は薫物への取り組みという点で他の家系、歌人らに比してどのように際立っていたのか、また、従来の研究における評価に比してどのように特徴付け得るのかを考える。

二―① 源公忠

光孝天皇孫で醍醐天皇御従兄弟の源公忠は、父国紀の早すぎる死や摂関家の更なる躍進により、官人としてのほとんどの時間を五位六位の藏人として過したが、醍醐天皇の寵臣として長く近侍したほか、続いて即位した朱雀天皇や

撰関家からも重用されるなど朝廷の信任は篤く、晩年までに近江など大国の受領職を歴任した。上層社会で催された歌合や屏風歌では、いわゆる専門歌人として多数の和歌を詠出して勅撰集に入集し、中古三十六歌仙に数えられるほか、家集『公忠集』も今日に伝わる。放鷹、薫物の名人とも云われ、味覚も人より優れていたという。放鷹と味覚に關しては『大鏡』に、薫物の面では『薫集類抄』をはじめとする薫物指南書や『原中最秘抄』等の『源氏物語』古注釈書に、業績の程が伝えられている。

薫物の書の伝承によれば、公忠は母方から薫物の秘方秘説を継承しており、その源流は仁明天皇皇子本康親王にさかのぼるとされる。『薫集類抄』などの薫物指南書や、『原中最秘抄』では、公忠の母を、醍醐朝に薫物を調査して献上した典侍滋野直子とする。また、『薫集類抄』裏書勘物によれば、直子・公忠の薫物は、本康親王後裔の平隨時と流れを同じくしたとされる。^(注14)『薫集類抄』が成立したとされる平安末期に、滋野貞主の薫物は、一方では直子から公忠へ伝わり、もう一方では繩子を通じて本康親王へ伝わったと考えられていたのである。^(注15)

先行研究には、直子は長く後宮の官女として活躍し、宇多天皇の信任にも与っていたとの指摘もある。^(注16)公忠が滋野井井と号し、滋野貞主の滋野井第を伝領したとされることと、直子と同姓の滋野貞主も薫物の処方を書く残したとされることから、貞主、直子、公忠の三人は、近親者であろうとの説が行われてきた。^(注17)貞主は、曾祖父以来の儒学の才で身を立てた人物である。作詩に長じて多くの作品を残し、詩集『経国集』や、類書『秘府略』の編纂に携わった。仁明天皇の学問には東宮時代から奉仕し、後宮には、長女繩子と二女奥子の二人の娘を入内させている。^(注18)

仁明天皇皇子本康は、貞主女繩子或いは紀名虎女種子との間に生まれたとされる人物で、薫物の道の名家としての評判を後世に伝えている。『薫集類抄』や『源氏物語』所引の薫物についての勘物によれば、本康親王は父帝の「御仰言」をとともなう薫物方を所持したという。古注釈書は、『源氏物語』梅枝巻に紫上が継承した方としてあらわれる

「故式部卿宮の二つのほう」は、その道の名家として知られた本康親王の薫物方を意味するのであって、光源氏が所持したとされる「承和の御いましめ」の方は、本康親王の方の源である仁明天皇の方に当ると指摘し、今日の研究においてもそのように考えられている。なお検証を要する説であるが、仁明天皇と本康親王とが教養の習得に際して師弟関係にあった可能性は否定できず、近年では、薫物の相伝が音楽のそれと並行して行われたとの見方も示されている。^(注20)

公忠は、「延喜聖代」ないし「醍醐朱雀朝」に、藏人所の小舎人大和常生とともに「合香之役」を勤めたとされる。

右二方は藏人所小舎人大和常生之秘方也件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合香之事者也

〔薫集類抄〕上 大和常生「侍従」

公忠朝臣

号延野井中 右大弁 從四位下
光孝天皇御孫 醍醐天皇御孫

天曆一年十月廿八日卒
六十卒

高名薫物合好手也云々

延喜天慶間右大弁公忠朝臣藏人所小舎人大和

常生相並奉合香之役

〔天理図書館善本叢書『河海抄』一（八木書店、昭六〇）梅枝卷72（82頁）

『薫集類抄』などの薫物資料によれば、公忠は、天慶六年二月廿一日に「荷葉」という薫物を進らせたほか、嵯峨天皇弟皇子の淳和天皇ゆかりの「洛陽薰衣香」という薫物も献上したとされる。^(注21) また、『原中最秘抄』は、公忠・常生の両名を「薫物高名人数」に加えている。^(注22) 以上の伝承が事実であれば、公忠は薫物を調合して皇室へ献上したり、高貴な血筋に伝来する前時代の秘方を学んで調合し、いにしへの薫りを現在に甦らせるといった活動に取り組んでいたことになり、大和常生は、職人的な実務に熟達した小舎人として、公忠の配下で合香にまつわる仕事に従事していたと考えられる。

平安中期の歌合は、歌中心の競技構成から音楽、舞踊などの様々な要素を競合の対象に加える構成へと拡大しつつあり、薫物はその新しい構成要素の一つと考えられた。公忠の和歌文学活動と薫物との具体的な関係については、次節の論旨と関わりが深く、その中で考察することとするが、歌合の場に於ける薫物の用途と存在意義の高まりは、公忠のように、歌も薫物も得意とした公卿にとって、活躍の場を広げる上で有利に働いたことであろう。

二② 藤原公任

藤原摂関家の名門小野宮流に生まれた藤原公任は、時勢の変化により家格と力量にふさわしい官位に補されることはなかったが、道長へ追従することにより朝廷における安定的な地位を獲得した。^(注24) また、和歌や音楽、書道に有職故実といった多彩な分野で本領を発揮し、上層社会を代表する歌人、有識者として世間の信望を集めた。この公任が得意としたとされる教養の一つに薫物も含まれている。伊井春樹氏、^(注25) 後藤祥子氏や竹鼻績氏らの研究成果に言及されてきたように、薫物は、公任の多様な教養の一つであった。後述するが、家集の詠歌によれば、公任の父頼忠は薫物の調合に定評があり、天皇に入内した遵子と親子の姉妹もまたその道に造詣浅からぬ者であったと考えられる。

公任の薫物について、『薫集類抄』は、公任が、小一条皇后藤原成子（注26）の梅花と同じ処方と、滋野貞主の黒方と同じ処方を所持したと伝えている。

小一条皇后

成子 三条院女御 小一条大將濟時一女
大納言公任同用之

〔『薫集類抄』上「梅花」〕

滋宰相

小一条皇后與此方無相違公任期同用之
小一条院方又同之入道一品宮女房隆興方同之參議師成又同之

〔『薫集類抄』上「黒方」〕

小一条皇后の梅花について、『薰集類抄』裏書勘物は、「公任卿和香之伝不_レ見」とした上で、公任が祖父の八条大將藤原保忠から父頼忠を経て、或いはもう一人の祖父清慎公藤原実頼から父頼忠を経て、薫物を相伝した可能性と、公任が薫物にいか長じたかを伝える逸話を紹介している。

公任卿和香之伝不_レ見但廉義公者、八条大將養子也、用之所習伝也。亦_{（ヲソクハ）}清慎公殊和合薫物_{（ニ）}若其伝歟。台嶺有_{（ニ）}戒源法橋者談_{（ニ）}曰戒源_{（一）}母者故四條太后之侍女也仍成_{（ニ）}人於彼宮中_{（一）}太后曰、我和合薫物而誤_{（テ）}入_{（ニ）}過薫陸之分數_{（一）}者、于時公任卿參入、太后示給云、所合之薫物無_{（ニ）}被試者_{（一）}、取_{（レ）}火於_{（ニ）}薫炉_{（一）}燒_{（レ）}之被申云薫陸頗過、太后殊褒美_{（ス）}然則納言長_{（ニ）}此道_{（一）}尤可_{（レ）}謂_{（ニ）}至極_{（一）}歟、

（『薰集類抄』上 小一条皇后「梅花」裏書勘物）

従来は、『薰集類抄』の公任関係記事は以上に留まると考えられていたが、後藤祥子氏は、『薰集類抄』上巻で嵯峨源氏源定を意味した四条大納言について、下巻ではその構成上、公任として編集の為された可能性を指摘されている。^{（注28）}

『薰集類抄』以外の既存の文献のうち、公任ゆかりと称する薫物の処方や説を載録するのは、『原中最秘抄』である。同書は、源公忠や大和常生と共に公任を薫物名家の一人として挙げるほか、「百歩方」という種類の薫物の、公任の処方と調合法を載録している。

一、（中略）百歩のほかをおほく過にはふまて

又或人云薫物の百歩の方の事也云々 行阿云百歩方 四条大納言公任卿秘香也

沈 占唐各一斤 蘇香 白檀 零陵各八兩 乳頭五兩 麝香 甘松各四兩 白膠 鬱金各八兩

右上種をこまかに春て篩て以_レ蜜合丸してしらちの杯を蓋覆にして三七日水辺の土中にほり埋て後とり出し
可_レ焼_レ之云々
〔源氏物語大成〕 卷七所収「原中最秘抄」 絵合卷 562、563頁

『公任集』^(注29)は、公任が頼忠の喪中に薫物を乞われ交わしたという次の一首を載録する。

父おと_二うせ給ふての比_一⁽²⁾、たきもの人のこひたるつかはすとて

花だにも散たる宿の垣ねには春の余波もすくなかりけり (254番歌)

竹鼻氏らによる先行研究には、薫物の種類は「梅花」で、亡き頼忠の形見分けの品として贈答された可能性の-high
ことが指摘されている。詞書には誰の「たきもの」か書かれていないのだが、頼忠の薨去後に薫物を求めてきたところからすると、単に公任家のだれかが調合した品を求めていることは明らかである。頼忠と親しい人物の求めに応じて行われた贈答と考えられようが、単に故人をしのぶよすがとしてのみならず、薫物の手本として手許に残したいという思いもあつたとすれば、頼忠の調合した梅花には、この人物から優れた品として評価されていた可能性がうかがえる。

「春の夜の闇にしなれば／匂ひくる／梅より外の／花なかりけり」^(注30)など、梅花の芳しさを称えた公任の和歌や、公任の北白川山荘の花々の美しさが評判となっていた。公任が頼忠の秘方や手業を習い伝えて薫物の梅花を調合したとすれば、その芳香には世間から相当の期待が寄せられたものと推察されよう。

先行研究には、右の一首が『拾遺和歌集』巻第十六雑春載録の藤原高光歌高光が如覚と号して比叡山に籠っていた際に知人から薫物を所望され、手許に残る少しばかりを、花びらをわずかにとどめた梅の枝に添えて贈った一首「春すぎて／ちりはてにける／梅のはな／たゞかばかりぞ／枝にのこれる」^(註13②)の趣向と表現を踏まえて詠まれたものと考えられている。高光歌では、公任歌のように故人をしのぶすがとして薫物をとらえているわけではないが、同時期に詠まれたと考えられる和歌の中には、遠国に向かう知人への餞別の品として薫物を贈った折の心情を詠んだものが見られる。薫物を餞別の品として贈ることは『うつほ物語』や『源氏物語』にも記されている。高価で貴重な品であることに加えて、贈り主の趣味や才覚、工夫の程が芳香にあらわれやすいこと、或いは、家伝の秘方を調合した場合は贈り主に特徴的な品であることから、受け手の側が贈り主のまごころや人となりを追想するにはふさわしい品であるため、餞別の品にふさわしいと考えられたのかもしれない。^(註1④)

公任と同世代の人物による和歌のうち、たとえば『後拾遺和歌集』巻第十哀傷載録の選子内親王歌には、亡くなった女房が遺した薫物「百和香」を親族に贈り届けた際に、この薫物を「つみたる花のかずかず」にたとえて「かたみ」として詠んだ一首が見られる。公任歌と同様の状況下で同じような心情を述べているかのようにもとれるが、公任歌での薫物は貴人の遺品として詠まれており、高貴な人物による名品としての価値を汲み取ることも可能であろう。高光歌の表現と、離別哀傷の思いを託す要素としての働きを取り入れることで、薫物を故人をしのぶ題材としながら、公任家の薫物の価値も歌の奥深くに詠み込まれていたとすれば、そこに選子歌に対する公任歌の特徴を見出し得るかと考える。

さて、公任の家系と薫物との関わりについて、前掲の『薫集類抄』小一条皇后「梅花」裏書勘物は、頼忠の薫物が、頼忠の父藤原実頼か、或いは、『公卿補任』や『尊卑分脈』^(註31)が頼忠実父と伝える八条大将藤原保忠から伝来した

可能性を指摘している。保忠は、『薫集類抄』上巻に、八条式部卿本康親王の孫なので親王の薫物の方を伝えた可能性がある^{〔注32〕}とされる人物である。一方で、「亭子院前裁合」で用いられた薫物の銘を記載する本稿——①所掲の『薫集類抄』記事には、実頼が特に薫物の菊花を好み、実頼叔父の枇杷左大臣藤原仲平も同じく菊花の処方^{〔注33〕}を習い伝えたとの伝承が記されている。

実頼と保忠のいずれを公任家の薫物の祖と見るべきか、という問題点について、竹鼻積氏は、「梅花・黒方ともに（公任と）八条大将の調査は異なっている」^{〔注33〕}点に注目し、「公任の調査は、恐らく父頼忠の義父である保忠からではなく、清慎公から伝えられたものであろう」と述べている。後述するが、竹鼻氏が指摘した仲平、実頼、頼忠から公任へ繋がる薫物相承血脈の信憑性を裏付ける資料数点の存在も確認されている。しかしながら、公任家の薫物が、この血脈に限って相承された^{〔注34〕}と見なすのはいかがであろうか。有職故実書『類聚雜要抄』には、薫物に関して、公任と小野宮右大臣藤原実資では源を同じくするが説を異にした、との逸話が残されている。公任の伝えた薫物に関する有職故実が、実頼一人を源としないためかもしれない。公任家の薫物に関する今後の調査、研究は、実頼だけでなく保忠をはじめとする他の方向からの伝来の可能性も視野に入れて行われるべきであろう。

右の伝承の内容が事実であったとして、仲平は、どのような経緯と手段によって薫物方を習い伝えたのであろう。鎌倉末期の延慶三年（1310）、正和三年（1314）書写と伝わる薫物指南書『薫物方』^{〔注35〕}の記事よれば、公任と源公忠が、仲平の黒方と同じ処方を所持したという。

枇杷左大臣 仲平方

沈四両 丁二両 白一分 甲一両二分 麝香二分 薫一分

公忠弁 公任大納言方同之

(宮内庁書陵部蔵本〈函号266—118〉7丁ウ)

『薫集類抄』は、公任が滋野貞主の処方と同じものを、小一条家ゆかりの人々と共に所持したと伝える。事実であつたとすれば、本康親王の孫の保忠から頼忠を経て薫物処方が公任に伝来した可能性が認められる。^(注36)ただし、同じ処方を小一条家の人々やその末流の、藤原朝元女で入道一品宮女房の陸奥^(注37)も伝えているというのだから、滋野貞主の方は、小野宮家と小一条家の祖である藤原忠平の代に、藤原摂関家へ伝来した可能性も浮かんできく。

摂関家の忠平に重用された公忠は、摂関家の屏風歌や歌合に度々和歌を詠出し、仲平と同席する機会もままあつたようである。

ひは殿の左大臣になりたまひて御よろこひにおほきおと、おはしましたりければ御あるしになにつかうまつ^(ツマ)
りてかはらけあまた、ひなりにけるほとに中納言あつた、のきみ御前のむめをかさして

おそくてもつひにささぬるむめの花たけうゑおきしたねにかあるらむ^(ツマ)

おほきおと、

をりてみるかひもあるかなむめの花ふた、ひ春にあふこ、ちして

あるしのおと、

むまれきに花さく春のなかりせはまちかきえたもたれかをらまし

つかうまつれる

いろもかもことしの春はむめの花ふたへに、ほふ心地こそすれ

『公忠集』^(注38) 1—4番歌

こうした和歌文学活動のあり方は、撰閑家への公忠の追従の姿勢を物語るものであろう。公忠が、皇統の秘方よりは個人的授受の許されそうな、家伝の薫物の処方や説を仲平に教えたとして、さほど不思議ではない。公任が仲平の処方と同じものを所持したと伝える記事は、京都大学図書館菊亭文庫所蔵の薫物指南書『薫物秘蔵抄』^(注39) 載録の、一連の公任処方にも見える。仲平から実頼、頼忠を経て公任に至る薫物相伝の血脈には信憑性が感じられる。^(注40)

公任の家系と薫物との関わりについて、竹鼻績氏は、「公任家が調合の名家であると言えるほどの記述は『薫集類抄』にはみられないが、公任が薫物の調合に長じていたことは認められる」と述べられた。^(注42) 『薫集類抄』に於ける公任の存在感の希薄さは否めないが、『薫集類抄』の伝承によれば平安初期の名家の処方と同じものを伝えていたとされるし、裏書勘物には妹の四条宮遵子の御前で名家と呼ばれるにふさわしい力量を見せたとも伝わる。また、前述のように、『原中最秘抄』は公任を薫物名人と一人と伝え、その処方とされるものを載録しているし、その他の古注釈書や新出資料にも公任ゆかりとされる処方や調合法が複数確認されている。公任家は、皇統からは仁明天皇や本康親王以来の、藤原撰閑家側からは仲平以来の薫物の諸方や技の集結した、宮廷社会を代表する薫物名家として位置づけられるべきであらう。

前掲の一首をはじめとして、薫物の贈答を契機に交わされた『公任集』の贈答歌は、公任と近親者ないし知人との間で行われたと思しきものがほとんどである。それらによれば、公任は、同母姉妹の円融院皇后・遵子と花山院女御・醍子の元で薫物を調合したり、献上したり、親戚や知人の求めに応じて薫物を分ける事があった。こうした贈答歌は、先行研究では日常詠として理解されてきたが、公任家の薫物の由緒から推して、より深刻な意味合いを汲み取るべきではないだろうか。

公任の薫物が、彼の家系に代々伝わる秘方や公任自身の工夫した処方により調合されたとすれば、上層社会の人々

の憧憬を誘うには十分な価値が認められ、高貴な辺りを相手にした贈答にも喜ばれる品であったと考えられる。後見や社交を目的とした単なる贈答としてではなく、自分がただの臣下の家系に生まれた者ではないことや、自分の才能がいかに多彩であるかを相手方に再認識させたり、文化的活動範囲の拡大を期待したりして行われた贈答と捉えるべきかと考える。

二③ 公忠、公任以後

公忠の薫物は、三条院御持僧で歌人としても知られた公忠子息観教大僧都と「宜子」なる子女、ならびに公忠後裔の源経信に受け継がれた可能性がある。

『薫集類抄』は、観教の黒方の処方と薫物調査の説を載録し、『原中最秘抄』は、平安時代の薫物名人の一人として観教の名を挙げる。^(注45) 観教は、弟の観祐とともに、歌の道の先人として父公忠の教えを尊んだと伝わる人物で、薫物に関しても、父の影響を少なからず受けた事が想像される。宜子は、『類聚雑要抄』^(注47)にのみ名前の見える女性である。既存の史料に名前の見える公忠女と同一人物か否かは明らかでない。『薫集類抄』も採録する、滋野直子の献上した八条宮の薫物を何処かへ献上した、とされ、宮中に仕える女房であった可能性も窺える。また、『薫集類抄』には、後冷泉朝随一の文化人として知られた源経信の説も載録され、公忠の説に学んだものではないかと案じられている。^(注48)

一方で、公任家にゆかりとされる薫物の方や説は、どのような経緯で後世に受け継がれたのか明らかでない。『原中最秘抄』所掲の公任の百歩香（本稿11頁）は典拠が知れず、また、『薫物秘蔵抄』載録の公任処方群を伝えた典籍を所持したと云う「後徳大寺左府」^(注40)（末尾）が藤原実定に比定したとして、公任から実定に至るまでの相伝の実態は、既存の資料に明らかでない。

結

薫物の教養としての位置づけは、上層社会における継承と発展を重ねて行く中で次第に重要なものとなり、村上朝を中心とする平安中期には、天皇の主催による和歌文学活動に美的構成要素として取り入れられたり、当代随一の有識者による和歌の題材、素材として詠まれるようになるなど、和歌に連動した享受が行われていた。薫物の道の名家としての評判を後世に伝えた平安時代の勅撰歌人のうち、源公忠は醍醐朱雀朝前後の朝廷において「合香之役」を務めたとされる名家で、薫物を職掌の維持や文化的な活動範囲の拡大に繋げるという方向性を、当時の上層社会で初めて興した人物と考えられた。また、円融一条朝随一の教養人として誉れの高い藤原公任も、家系を通じて有力な薫物秘説を継承していた。公任は、薫物の調合と贈答に際して薫物を題材とした和歌を創作する際に、藤原高光らによる先例を踏まえた類型的な表現を用いながら、より直接的かつ具体的に、自身の思いや相手との関係、家の薫物の特徴を詠み上げていた。これにより、薫物を題材とした和歌の詠み方に新らしみを打ち出すとともに、多様な才覚と優れた素養の持ち主であることを世に知らしめ、薫物の方面における自身と家系の社会的評価を一層確かなものとしたと考えられた。

公忠と公任の薫物との関わり方には、家柄が良く教養豊かでありながら不遇をかこつ上層貴族が、薫物に長ずることによって、いかにその活動範囲や創作の方向性を特徴的なものにし得るかという点についての可能性が示されていると云えよう。撰関家主導の当時にあつて、家柄、教養とちらによつても撰関家を凌駕し得ない立場の有識者にとり、薫物は、限られた範囲において新たな活路を見出すための「切り札」となり得たのではないか、そのようにも考えられるのである。公忠、公任に類型的ともいえる薫物との関わりを見せた可能性のある文化人として、公忠後裔の

源経信を想定し得るかもしれないし、南北朝期以降の三条家歴代当主や、室町時代の同家の当主である龍翔院公敦らのような存在もまた、公忠、公任の〈系譜〉につらなるものとして数えられるかもしれないが、平安後期以降の人物と文学、薫物をめぐる活動の有り方については、稿を改めて詳しく検討したいと考えている。

注

注1

『原中最秘抄』は『源氏物語』梅枝巻・薫物比べの場面に見える実在の薫物名家・仁明天皇、朱雀天皇、源公忠の薫物処方と、物語の式部卿宮が準拠するとされる仁明天皇皇子八条式部卿宮本康親王ゆかりの薫物処方、ならびに紫式部とは同時代を生きた皇統、臣下にゆかりの薫物処方方で、物語の薫物に類似した銘の薫物処方載録する。『河海抄』は梅枝巻に関連する実在の薫物名家に絞り薫物諸説を載録。物語と史実との関連性をより明確に示そうとしたものと考えられる。梅枝巻の薫物について取り上げた研究論文等のうち、本稿の執筆に際して主に参考としたものは次の通りである。

①池田亀鑑編『源氏物語事典』上・下(昭四三・四〇、東京堂)、玉上琢弥『源氏物語評釈』第六巻(角川書店、昭四二)

②尾崎左永子『源氏の薫り』(朝日新聞社、平四)

③石田稔二「朱雀院のことと準拠のこと——源氏物語の世界——」(『学苑』238号〈昭三五〉)初出、『源氏物語論集』(桜風社、昭四六)再録

④同「くのえ香——明石の上のこと——」(『源氏物語論集』(桜風社、昭四六))

⑤加納重文「薫物と手本」(秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界』第六集〈有斐閣、昭五六〉)

⑥三田村雅子「梅花の美」(同上初出、『源氏物語感覚の論理』〈有精堂、平八〉再録)

⑦瀬戸宏太「源氏物語の薫物——末摘花と紫上をめぐって」(『国語と国文学』69巻9号、平四)

⑧藤河家利昭「八条の式部卿について」(『広島女学院大学国語国文学誌』27号、平一一)

⑨同「梅枝の巻の『前の朱雀院』について——史実と物語との関係」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』3号、平一二)

⑩拙稿「紫上の薫物と伝承」(『源氏物語をいま読み解く2 薫りの源氏物語』、三田村雅子・河添房江編、翰林書房、平二〇)

⑪拙稿「『源氏物語』の女君と薫物」(『広島女学院大学公開セミナー論集『源氏物語』と王朝の教養』、広島女学院大学総合研究所、平二二)

注2 萩谷朴『平安時代歌合大成 増補新訂』(同朋社出版、平七) 第五卷、3213頁参照。

注3 『薫集類抄』上巻に、薫物処方の考案、伝来に関係して名前の見える倭人は次の42名で、二十一代集に御製、詠歌の載録される22名を傍線で示した。以下、本稿『薫集類抄』テキストには拙稿「国立国会図書館所蔵『薫集類抄』影印と翻刻(上)(下)」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第九、十号、平一八二九)掲載の翻刻を使用。

仁明天皇 陽成天皇 淳和天皇 宇多天皇 朱雀天皇 賀陽親王 貞保親王 本康親王 惟喬親王 敦明親王

藤原詮子 藤原遵子 藤原敏子 源定 源公忠 藤原冬嗣 藤原長良 藤原清経 藤原元名 藤原実頼 藤原仲平

藤原保忠 藤原公任 藤原頼通 藤原頼宗 藤原教通 藤原師成 藤原知章 藤原致忠 藤原保昌 平隨時

滋野貞主 滋野直子 大江千古 大和常生 陸奥 観教大僧都 山田尼(山田中務) 忠覚入道 丹波雅忠

『原中最秘抄』絵合巻勘物には、平安中期の薫物名家次の通り列挙される。

薫物合高名人数 仁明帝（治暦元年即位） 朱雀院 白河院 八条式部卿宮 同孫子左大将保忠 四条大納言公任

右大弁宰相公忠 内蔵頭兼房朝臣 大江千里 故皇后宮（九条右大臣女） 典侍滋野直子朝臣 藏人所小舎人大和常生

観教大僧都

『源氏物語大成』巻七(中央公論社、昭三二)所収「原中最秘抄」絵合巻注釈24、25頁記事編集)

注4 注2所掲の萩谷朴論著第一巻、123頁参照。

注5 注2所掲の萩谷朴論著第一巻、108頁参照。

注6 本文は「仮名日記丙」翻刻(注2所掲の萩谷朴論著第一巻385、386頁)参照。

注7 先行研究における色彩を中心とした意匠についての検討結果は森田直美「『栄花物語』の「皇后宮春秋歌合」——特に女

房装束の描写に注目して——」第四章「歌合の装束——皇后宮春秋歌合以前——」、「平安朝文学における色彩表現の研究」(風間書房、平二三)に詳しい。

注2 所掲の萩谷朴論著第五卷、3214頁参照。

注1 所掲の拙稿⑩⑪参照。

注10 治暦四年四月六日被合侍従一臈ハ香七兩二分四朱(『薫集類抄』上 二条関白「侍従」)

注11 治暦四年四月六日被合一臈(同右「黒方」)

あはする次第まつ沈と丁子とをあわせて次に甲香次に白檀次麝香次に薫陸さてひとつにひちくりてあはするかよきなり六朱を一分とす四分を一兩とす十六兩を小の一斤とす卅八兩を大の一斤とす小の三兩を大の一兩とす小の三分を大の一分とすすこしあはせんとおもは、これらをつもりてあはすへきなり侍従梅花をかしうかをりたれともたきものともおほえすすこしなりともくろほうをもちゐるへきなり(『薫集類抄』上 四条宮「黒方」)

さらにいづれともなきなかに、斎院の御黒ほう、さ言へども、心にく、しづやかなる匂ひことなり。侍従は、おとゝの御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なり、と定め給。(新日本古典文学大系21『源氏物語三』梅枝巻156頁)

二十一代集載録の和歌のうち、村上朝に遠からぬ時期に薫物に関係して詠まれたと見られるものには、たとえば以下の七首がある。(以下丸括弧内と通し番号は筆者記入。詞書と作者、本文との区別は斜線で示す。国文学研究資料館作成二十一代集データベース〈底本は正保版本二十一代集〉参照)。

①百和香／読人不知／花ことにあかすちらしく風なれはいくそはかうしとかは思(『古今和歌集』卷第十物名)

②しなへまかりける人に、たきものつかはすとて／駿河／しなのなるあさまの山も、ゆなれはふしのけふりのかひやなからん(『後撰和歌集』卷第十九離別羈旅)

③ひえの山にすみ侍けるころ、人のたき物をこひて侍ければ、侍けるまゝにすこしを、梅の花のわつかにちりのこりて侍る枝につけてつかはしける／如覚法師(高光)／春すぎてちりはてにける梅のはなた、かはかりそ枝にのこれる(『拾遺和歌集』卷第十六雑春)

④少納言なくなりてあはれなる事となけきつゝ、をきたりける百和香をちいさきこにいでて、せうと棟政朝臣につかはしける／選子内親王／のりの為つみける花をかすかすに今はこのよのかたみと思ふ(『後拾遺和歌集』卷第十哀)

傷)

⑤ある女に／清原元輔／うつり香のうすく成行たきもの、くゆるおもひに消ぬるへき哉(同右、卷第十三恋三)

⑥山寺に侍ける比、五節奉る人の許よりたき物かうはしくあはすとてこひ侍けるに、橘の枝につけてつかはすとて／藤原高光／末の世になりもてゆけは橘もむかし香にはなるへくもなく(『続後拾遺和歌集』卷第十六雜歌中)

⑦中納言兼輔にあひはしめける比はいまた下臈に侍ければ、女はあはんの心やなかりけん、男も宮つかへにひまなくて、つねにもあはさりける比よめる／三条右大臣(定方)女／たき物のくゆる心はありしかとひとりはたへてねられさりけり(『新拾遺和歌集』卷第十四恋歌四)

注 14 角田文衛『日本の後宮』(学燈社、昭四八)付録「歴代后妃表」「歴代主要官女表」、ならびに同監修『平安時代史事典』(角川書店、平七)資料・索引編「日本古代後宮表」に、源公忠母と云われる典侍滋野直子朝臣は、光孝天皇御世の「更衣滋野直子朝臣」(『三代実録』光孝天皇仁和二年九月三十日条)ならびに宇多天皇御世の「宣旨滋野」(『寛平御遺誡』)と同一人物として示されている。

注 15 杉谷寿郎「歌人源公忠」(『りてらえやばにかえ』五号、昭三七)、盧愛子「源公忠小考」(『女子大國文』〈京都女子大学〉三八号、昭四〇)参照。

注 16 『文徳実録』仁寿二年二月八日条参照。

注 17 本康親王母について『文徳実録』仁寿二年二月八日条、『本朝皇胤紹運録』本康親王条、『薫集類抄』上・八條宮「梅花」項が、滋野貞主女従四位上滋野繩子と伝える一方、藤原定家自筆本『古今和歌集』勸物や「原中最秘抄」『紫明抄』『河海抄』梅枝巻注釈は、紀名虎女従四位下紀種子と伝える。『花鳥余情』記載の「従四位上滋野温子・参議貞主女」(傍点筆者記入)は滋野繩子の誤伝であろう。

注 18 藤河家利昭「八条式部卿について」(『広島女学院大学国語国文学誌』第二七号、平九)参照。

注 19 凡合香法管窺輩多、稱其能然頗得其道者公忠朝臣、隨時朝臣等也、公忠者伝典侍直子説称雄隨時者、以八条李部王之孫得_レ名、此兩人、其流雖同其派猶異、口説相連、手方相乖、公忠先搗洗_レ香、作_レ散和合後、以_レ廉羅飾、_レ詔入_二煎蜜_一更和合良久、研黏取_二入鉄臼_一搗三千許杵搗了、斤定和_二蜜欠数_一取出如_レ丸入_二瓷壺_一埋七日、隨時亦春洗香和蜜了、春無數以_レ多為_レ能_{法理一如前}亦公忠熟_レ鬱金、代用_レ麝香隨時_ハ以_二黄鬱金_一通用其説非_レ一其論難_レ定、今見_二拾遺本草_一隨時

所_レ陳己以相違、亦大唐僧長秀云、熟_{本無此字}鬱金花、和_二白蜜_一所_レ作之物也、云、見_二此兩種其不_レ同也、非可通用云々、
 〔薫集類抄〕下「合和」或説の裏書勘物）

注 20 注 18 藤河家氏論稿に詳しい。

注 21 源公忠による薫物「荷葉」進上の年次について、『薫集類抄』諸本には「天曆_建六年二月廿一日甲午進之」とある。『原中
 最秘抄』以下の『源氏物語』古注釈書と『類聚雜要抄』はこの年号を「天慶」として載録する。

注 22 洛陽薰衣香 出守和院供公室邸所藏也（以下処方一点省略。『薫集類抄』上「薰衣香」）

注 23 注 3 参照。

注 24 山口博『王朝歌壇の研究 宇多醍醐朱雀朝篇』（桜楓社、昭五七）第五章第一節参照。

注 25 伊井春樹『公任集』（昭六三、桜楓社）

注 26 伊井春樹、津本信博、新藤協三『公任集全釈』（私家集全釈7、風間書房、平元）

注 27 後藤祥子「公任集注釈」（新日本古典文学大系28『平安私家集』、岩波書店、平六）

注 28 竹鼻績『公任集注釈』（私家集注釈叢刊15、貴重書刊行会、平一六）

注 29 同「大納言公任集」（『中古歌仙集』、和歌文学大系54、平一六、明治書院）

注 30 注 26 所掲の「公任集注釈」254番歌脚注2参照。

注 31 以下「公任集」テキストは注26「公任集注釈」。

注 32 「公任集」。詞書「やみはあやなしといふ題を」。

注 33 「公卿補任」応和三年条によれば、藤原頼忠は実頼と時平女の間_二に生まれて後に右大将保忠が子にしたと伝わり、『尊卑

分脈』は頼忠について「或実父保忠」とする。保忠薨去の年に頼忠は十一歳であったと見られる。薫物の秘方、秘説を

伝授されたとして、それはその写しや身近な第三者の指南を得てのことであろう。

注 34 八条大将 宇治関白用此方（処方略） 大将者八条式部卿親王之孫也 然則伝来方可同承和方而有相甚可疑之（『薫集類抄』

上 八条大将「侍従」）

注 35 注 27 所掲『公任集注釈』709頁参照。

同ジク四条大納言二問ハル。大納言申サレテ云ハク、次ノ一合ノ中、小宮ニ合ニハ薫物、節ニハ糟ヲ入レルトイヘリ。

右府此ノ由ヲ聞キタマヒテ、之ヲ嘲ラル。詳シクハ清慎公御記ヲ見ヨト云々（『類聚雜要抄』卷二「薫物ヲ香壺箱ニ納ムル事」。以下、本稿での『類聚雜要抄』テキストは川本重雄、小泉和子『類聚雜要抄指図卷』（中央公論美術出版、平一〇））

注35 『薫物方』は延慶三年（1310）、正和三年（1314）の書写者識語の伝わる薫物指南書。撰者や類纂の詳細は不明。諸本は管見に宮内庁書陵部所蔵の一本（函号266—118）と、京都大学壬生家文書の本（た3—1）とを確認している。書誌とテキストは拙稿「宮内庁書陵部所蔵『薫物方』影印と翻刻」（『広島女学院大学国語国文学誌』第三八号、平二〇）参照。

注36 注18所掲の論文に詳しい。

注37 『薫集類抄』上巻の薫物「侍従」滋宰相処方には、入道一品宮脩子内親王の女房であつた陸奥なる人物が、皇族や上層貴族と同じ薫物方を所持したとされる。同処方に対して行われたと見られる裏書勘物によれば、陸奥は藤原朝元女、肥前前司藤原定成妹で、はじめ宮仕えをしたが、後に都を離れて鎮西安楽寺辺りに居住したと伝わる。近年の和歌文学研究においては、『後拾遺集』636番歌詞書に「入道一品宮に侍けるみちのくに」とされる「みちのくに」、ならびに『四条宮下野集』に「一首入集する「女房陸奥」は、朝元女と同一人物である可能性が指摘されている。

【参考】犬養廉、平野由紀子、いさら会『後拾遺和歌集新釈』下、636番歌注釈、笠間書院、平八

注38 安田徳子、平野美樹『四条宮下野集全釈』1819番歌注釈、風間書房、平二一

注39 『公忠集』テキストは『平安私家集二』（冷泉家時雨亭叢書15、朝日出版社、平六）所収「公忠朝臣集・みちなり集」。

注40 京都大学図書館所蔵菊亭文庫『薫物合様』（請求記号・菊卷109）。

公任卿方

くろ方半さい

くむろく一分かろく さかう 二ふん 白たん 一ふんかろく

かい甲 一両かろく ちやうし 二両 ちん 四両

し、う 半さい

ちん 四両 ちやうし 二両五しゆ半 かい甲 一両一分二しゆ

うこむ 三分三しゆ半 かんせう 三分さんしゆ半

同

ちん 四両 ちやうし 二両一分 うこん 二分

かい甲 二分 かんせう 二分 さかう 一ふん

おち葉 ひは左大臣方半さい

ちん 四両 ちやうし 一両三分一しゆ かい甲 二分四しゆ

さかう 五しゆ半 かうふく 一ふん二しゆ そかうゆ 一分四しゆ半

梅花 半さい

ちん 四両一分 かい甲 一両二分 かんせう 二しゆ

白たん 一分二しゆ半 ちやうし 一両三分 くんろく 三朱二しゆもよし

かよふ 半さい

かんせう 三しゆ ちん 四両 かい甲 一両一分二しゆ

白たん 一しゆ うこん 一分 くわつかう 二しゆ

きく花 半さい

ちん 四両 ちやうし 二両かろく

かい甲 二分ちんよりもかろくちやうしよりはおもく

くんろく 壺分かろく かんせう 一分おもく

右七色之方寛文八年十一月十一日

後徳大寺左府書借写之了秘方也(以下、傍線・米記は筆者記入)

注27『公任集注釈』707—709頁参照

注27『公任集注釈』708頁参照。

注43

・父おとゞうせ給ふ(う)ての比、たきもの人のこひたるつかはすとて／花だにも散たる宿の垣ねには春の余波もすく
なかりけり(254番歌)

・内蔵頭たき物こひしを、梅に付てつかはし給ふとて／降雪にまがふばかりぞ梅のはなお（を）れば匂ひもとまらざり
けり（349番歌）

・返し／なつかしみ袂にかゝる梅が枝を風にしられぬことをこそ思へ（350番歌）

・おはしなれてのころ、たき物を聞えたりければ／いにしへは契りし宿のをみなへしかをむつまじみしりもこそすれ
（420番歌）

・こ君と聞ゆる、返し／女郎花おなじ野べにはおふれ共契りしねにはあらずとか聞／此歌ども心えねど本のまゝと（421
番歌）

・たき物あはせてうへに置いて出給ひにければ、すこしとゞめ給うふ（う）て、女御の御／残りなく成ぞしにけるたき物
の我ひとりにし任てしかば（466番歌）

・と有ければ／くゆるべき人にかはりてよもすがらこの渡りこそ下こがれつゝ、（467番歌）

（以上、注27『公任集注釈』より）

注44 観教の閨歴や人物についての逸話は『僧綱補任』『護持僧補任』『古今著聞集』に記載。和歌の作品や歌人としての逸話は『拾遺和歌集』『新続古今和歌集』『俊賴髓脳』に見える。『源氏物語』古注釈書や『薫集類抄』などの薫物書には合香方や説が伝わる。

注45 『薫集類抄』上巻「黒方」、下巻「合和」の項に観教ゆかりと伝わる諸説載録。『原中最秘抄』勘物は注3参照。

注46 『俊賴髓脳』「みづうみと」和歌解説参照（佐佐木信綱編『日本歌学大系』第一巻、風間書房、昭三八、214-215頁）。

注47 拾遺 沈大四両 丁子大二両 甲大一両 甘松小一両 熟薝小一両 占唐小一分

今尋一説入麝香一説用黄薝金或本占唐十之又言若无薝金者其代二麝香小二分ヲ加ヨ或又占唐小三分ヲ加之或口伝云蜜和研合搗三千杵炮甲香以和蜜塗之合黒黄不得過黒此両種方不伝男子是承和仰事也延喜六年二月二日 故典侍滋野□子朝臣所献方也 或宜子是公忠朝臣女也（『類聚雜要抄』）

注48 以文武火煎訖抹整寒温和雜香又曰蜜能煎テ未固程ニ以綿テ絞テ可合之（中略）経信卿云非猛非微以之為文武火也以微火為文以猛火為武也件卿公忠之末流也若有所聞歟但非微者已離文非猛者亦離武何以中火称文武乎（『薫集類抄』下巻「煎甘葛」公忠朝臣）

【付記】

本稿は、平成一七年度中古文学会秋季大会（於・大阪女子大学、現大阪府立大学大仙キャンパス）において同じ題目により行った口頭発表の内容を論文化したものです。貴重なご意見、ご教示を賜りました諸先達に対しまして、改めまして心より御礼申し上げます。

